

「感染症教育研究拠点形成で私たちが目指すもの」

長崎大学熱帯医学研究所教授 **安田 二郎**



廣告

長崎大学シンポジウム
「感染症対策の未来」

長崎大と文部科学省は10日、長崎市坂本1丁目の坂本キャンパス内にある医学部記念講堂で、危険度の高い病原体を扱えるBSL-3バイオセーフティレベル4施設設の坂本キャンパス設置について考える公開シンポジウム「感染症対策の未来」を開いた。

長崎大は施設を含む感染症教育研究拠点の形成についての構想を説明、その必要性や安全性に関する議論を通じ、市民に理解を求めた。片峰茂学長は冒頭、「BSL-4施設の設置と稼働は地域の皆さまの理解と支援が不可欠。グローバル化の時代において、長崎大の施設は地球規模の貢献と共に、地域活性化にも寄与するものと確信しています」とあいさつした。

シンポジウムには市民ら約400人が参加した。演本藤毅徳知事と田上富久長崎市長の来賓挨拶の後、「国境なき医師団日本」の前会長で長崎県出身の医師、黒崎伸子さんが途上国医療の実践を元に「ここから」の感染症に対して「人道援助団体の経験から」を題して基調講演。感染症研究の専門家らによるスウェーデンではさまざまな意見が交わされた。

私たちが施設を計画している坂本キャンパスには、医学部や熱帯医学研究所があり、150人以上の感染症関連の研究者がいる。研究用資材の入手が容易で、機能が發揮できます。施設的安全運営面でも適切です。高台にあり、警察署や消防署も近く、大学病院には緊急時に対応できる「二類感染症病棟」があります。最先端の施設設置により、感染症研究の世界的拠点として人が集まり、国内外に人材を輩出でき、長崎ブランド」が高まりました。ワクチンや治療薬の開発といった国際貢献が可能になり、国際的な学会の誘致も期待できるでしょう。若年人口の吸引定着も考えられます。海外の感染症について日本に入ることからない中、長崎にも世界にも貢献する研究を行っていききたいと思います。

BSL-4施設は、エボラウイルスなど予防・治療法がない致死率の高い病原体を安全に取り扱うための高度な封じ込め構造を持っている。生体認証などで入退室を厳格に管理し、作業は実験者同士の安全と病原体を持ち出さない相互監視の意図も含めて複数人で対応。万全のりすく管理を行います。

BSL-4施設は現在、世界23カ国・地域で52カ所以上あります。多くの施設は市街地の大学構内や病院に隣接。稼働がまっとう40年以上になります。近隣に病原体が漏えいして被害が発生した事例は一つもあ

西アフリカで2014年16年
ボラ出血熱の大規模で長期に感
染例が発生しました。2万8千人以
上が感染し1万1千人以上が死亡。
世界保健機関（WHO）は緊急事態
宣言を出し、わが国の侵入リスク
対策もとられました。地球の反対側
からであっても、24時間以内にウイ
ルスが国内に侵入する可能性があ
り、感染症は「対岸の火事」ではな
いことを認識するものでした。

いま、世界各地で新興・再興の感
染症が流行しています。感染症を克
服するには病原体の特性の把握を急
じめ、診断法やワクチン、治療薬の
確立が重要。そのためには、病原体
を安全に取り扱う施設が必要で、同
時に、研究人材の育成も欠かせませ
ん。

BSL-4施設の設置に向けた取り組みは、2006年度に、国立感染症研究所の呼び掛けで新興感染症を研究する調査研究に参画したことをきっかけにスタートしました。10年間に設置検討を始め、2年後に「坂本キャンパスへの設置」について学長ハッセジを公表。その後、東大内蔵取り壊築正研工機園の9大

大の施設は地球規模の貢献と共に、地域活性化にも寄与するものと確信しています」とあいさつした。

シンポジウムには市民ら約400人が参加した。濱本慶毅穂副知事と田上富久長崎市長の来賓挨拶の後、「国境なき医師団日本の前会長で長崎県出身の医師、黒崎伸子さんが途上国医療の実践を元に「これから感染症に対して…人道援助団体の経験から」と題して基調講演。感染症研究の専門「家」によるプレゼンテーションに続き、市民を交えたパネルディスカッションでは、さまざまな意見が交わられた。

「感染症対策の未来」

長崎大学副学長・学長特別補佐 調 漸

「長崎大学による感染症教育研究拠点形成への取り組み」



民のみなさんの声を聞きながら検討を深めていきたいと考えています。国際観光大都市を目指す長崎にとって、BSL-4施設は感染症克服への貢献を通じてそのプレゼンスを高める武器であると同時に、感染症の脅威から長崎を守る盾ともなります。

世界各地で40年以上にわたり安全に運営されてきた敷智を吸収し、21世紀の長崎を支えていきたいと考えています。

交えた地域連絡協議会も設置。近隣の自治会会長や公募委員ら26人で、この自治会7回開き、国立感染症研究所も視察しました。

私たちが最近、長崎の医療関係者87人に「エボラウイルスなどの病原体が長崎に入る可能性をアンケートしたところ、98%が「侵入可能性が高い、または可能性がある」と回答。極めて高い危機感をお持ちでした。

現在、長崎大はBSR1-4施設の

をBSJ、ソーシアムを施設、長崎大学に決めた。文部科学省も14年、本学を感染症研究拠点とするロードマップを決定しています。14年12月には、長崎市議会への請願、県議会への要望を行い、圧倒的多数の賛同をいただきました。それを受け、翌年、県と市との間で、感染症研究拠点に関する基本協定を締結。一方、35回を超える公開講座や住民説明会を70回以上開いてきました。また、観光や労働界、医学の専門家、弁護士、実業家などのメンバーで構成する有識者会議では、国の関与の在り方や運営面、安全確保策、地域域との共生などについて指摘を受け、これらの軸に検討を進めました。

県と市、大学の3者に地域住民を

BSL-4施設への設置に向けた取り組みは、2006年度に、国立感染症研究所の呼び掛けで新興感染症をに関する調査研究に参画したことをきっかけにスタートしました。10年きつかけにスタートしました。10年設置検討を始め、2年後に「坂本キャンパスへの設置」について学長メッセージを公表。その後、東大大学内自取の感染学研究機関の大学

大の施設は地球規模の貢献と共に寄与するものと確信しています」

シンポジウムには市民ら約400人、濱本慶毅穂副知事と田上富久長崎後「国境なき医師団」日本の前会医師、黒崎伸子さんが途上国医療現場からの感染症に対して「人道援助」と題して基調講演、感染症研究プレゼンテーションに続き、市民をスカベンジャーでは、さまざまな意見

感染症研究で世界と地域に貢献

パネルディスカッション「坂本キャンパスへのBSL－４施設設置を考える」には、市民代表に加え、感染症対策の専門家ら計6人が登壇、それぞれの立場から、意見や提言が活発に交わされた。

パネルディスカッション

「坂本キャンパスへのBSL-4施設設置を考える」

◎モデレーター
小玉 祥司 日本経済新聞社科学技術部シニア・エディター

◎パネリスト(順不同)

山田 安秀 内閣審議官 兼 国際感染症対策調整室長
久米 直 地域連絡協議会委員(山形県区連合自治会長)
寺井 幹雄 地域連絡協議会委員(公募委員)
黒崎 伸子 医師、国境なき医師団日本・前会長
西條 政幸 国立感染症研究所ウイルス第一部長
安田 二朗 長崎大学熱帯医学研究所教授

安全安心の裏付けを

小玉 久米さん、寺井さんは地域連絡協議会委員として、長崎大との話し合いで意見を述べられています。

寺井 私に住む地域は浦上天主堂の近くで、多くの外国人観光客が訪れることから、感染症について考えるようになりました。協議会に参加するまでは、議論を重ねないといけないうえBSL-4施設は危険なかという素朴な疑問がありました。今回の拠点整備計画の背景と目的を併

の根本を見失うてはならないかと思うようになりました。

BSL-4施設は、従来の施設より高いレベルの安全栓を持たせたもので、これからの感染症対策を考える糸口になると捉えており、私は設置に前向きです。坂本地区には半世紀以上わたって、医療拠点として多くの施設が集積。BSL-4施設も他施設と連携しなければ大きな成果は得られないと思いますし、この地区が選ばれたことは必要ではないでしょうか。

久米 山里地区連合自治会は19自治会で構成し、長崎大から説明を2回受けました。

模計・調整状況を踏まえつつ、必要な支援をし、わが国の感染症研究機能の強化を図ることを決定しました。

国の役割と責任については、7月中旬の地域連絡協議会の際、検討状況として説明し、公表しています。最高水準の安全確保と運営について、建設前から運用段階まで、一貫して国が積極的に関与していきます。BSL-4施設指定の際は厳格に審査し、安全対策に万全を期します。万が一の場合、国の職員等を現地に派遣して指揮をとります。地域との共生も自治体と協力し、主力で支援します。

その中で、私たちが目指す研究は他のウイルスに比べなぜ病原性が高いのかを解析すること。どうしたら病気の発症を抑えられるか、どうやったら治療できるのかということに結び付くものです。施設が坂本地区にできることで、従来とは違う次元で薬剤の開発もできます。それが対国際社会や地域の皆さまに對しても、感染症対策という意味で役に立つと考えています。

小玉 西條先生にお聞きします。久米さんのお話の中で「地域との共生」がありましたが、感染研で特に励みされた点などをお話し下さい。

機関、人材育成は大切です。

西條 長崎大医学部や熱帯医学研究所のこれまでの研究や人材育成、海外での活動状況は世界中から信頼を得ており、外から見ても素晴らしいものがあります。BSL-4施設はその活動の一環であり、特別なものではありません。長崎大が地域からさらに信頼される存在になつてもうえればと願っています。

寺井 長崎大が今考えられるリスクに対して最大限の努力をすることと明言して約束したことです、現在まで続く住民と大学との信頼関係を信じます。大学が私たちの安全と健康

長崎大がシンポジウム終了後に実施したアンケートには来場者の半数を超える221人が回答した。このなかで「BSL-4施設の安全性」について「よく理解できた」「わりと理解できた」が約9割を占める一方、「テロや天災に備え二重、三重の対策が必要」「人為的ミスが起きないように人材育成や管理を徹底すべき」「事故発生時に地元住民への対応、緊急時の連絡体制の整備を」などさまざまな見が寄せられた。長崎大はこうした声を参考に、具体的な安全対策等について議論を深めて施設整備計画に反映させるとともに、今後も市民との対話を進めていく方針だ。

私はこれまで有識者会議に傍聴人という立場で5回出席。3回目の会議で「大学の皆さんはそんなに長くこの地域にいらっしゃらない。しかし地域はいつまでもある。そういう観点から国に表に出てきてほしい」と申し上げました。

先日、東京都武蔵村山市にある国立感染症研究所を見学しました。小学校が隣接する場所にあり、BSL-4施設が地域と共存していると受け止めました。感染症研究を70年以上続けている長崎が挑戦することならば、地域は安全安心が裏付けされた施設を望みます。

小玉 久米さんから「国に表に出てきてほしい」という意見が出てきました。山田さん、国の立場をお話ください。

山田 昨年6月に大学と県、市の3者が研究拠点の整備を推進する基本協定を締結したことに敬意を表します。国はこの敬意を踏まえます。も、住民の理解が進むことが重要であると考え、本年2月

優れた人材を
長崎から輩出

小玉 会場から「長崎が世界にどのような貢献ができるのか」という意見がありました。どうお考えですか。

黒崎 長崎にBSL-4施設ができるということに興味を持ち、この場にとれたたくさんの方が集まったこと自体に、感染症の脅威に理解があり、世界に貢献したいという人材が長崎から育つという夢を持つことができました。長崎の被爆者や若い世代が「アーモア・ナガサキ」と被爆地を増やさない運動に取り組んでいることと同じようなことが起ると信じています。

小玉 安田先生に会場から質問です。BSL-4施設ができた場合、どのような研究をされるのでしょうか。

安田 全国の大学も利用できる共同施設ですので多くの国立感染症研究所が長崎に来て

含めたさまざまな角度から検討した結果、坂本地区が最適であるとの結論に達しました。この点は、議論に加わった全ての専門家が一致しており、その後に関われた有識者会議でも理解していただきました。

設置に向けては、米国をはじめ海外からの協力も受け、人材育成も積極的に行います。設置後は、私たちの手で優れた人材を輩出できるようにと期待しています。

世界最高水準の安全管理を

小玉 最後に皆さまから感想、ご意見を願います。

黒崎 国境なき医師団としても、さらに人的貢献をしたいと思っています。これから途上国でも先進国と同じレベルの医療を提供すべきです。それに必要な薬や機材など、私たちNIGOでも入手できるように頑張って思っています。

4施設はできません。感染症の問題を子や孫の代まで先送りすることになり、われわれが汗をかいて設置を実現することが重要だと考えます。

山田 長崎大には、江戸期に日本で最初の西洋医学教育施設を長崎に作ったオランダ人のボンベ軍医の遺志が伝承されています。研究拠点を育成された人々によって薬や検査方法が生まれてきます。世界や、長崎を含む日本人の命を救える施設となるでしょう。

この施設が平和を希求する長崎市の重要なパーツになると思います。皆さんが安心して誇りに思える施設となるよう、国はしっかりと支えます。

黒崎 長崎大学部の卒業生としてと言。旧長崎医科大学は唯一の被爆した大学です。原爆で命を落とした先輩たちのためにも、国際貢献を続けたいと思っています。

小玉 本日はありがとうございました。

透明性高め地域と共存

な根拠を提供する活動を通じて、国民の皆さんに感染症対策の分野で貢献することです。業務内容は、検査の中心的役割を果たす感染症のリアルタイム（照会）とサーベイランス（監視）のほか、ワクチンの検定・検査による決定、海外研究機関との国際協力や人材育成、感染症に関する基礎的応用研究などに当たっています。

感染症では、昨年8月からBSL-4施設を稼働できるとなりましたが、研究者が病原体を安全に取扱う上での管理（バイオセーフティ）や、病原体適切に管理するためのシステム（バイオセキュリティ）が重要です。また、研究者には、科学が持つ二面性（デュアルユース）をしっかりと理解し、社会に貢献できる研究を行うことが求められています。

感染症のBSL-4施設では、建物の構造、空気を排気用高性能フィルターへバフィルターで二重に通して室外に出すといったハード面の安全対策はもうずいぶん前からなされています。ソフトウェアでも安全操作指針や細かい作業を明文化した標準手順書などを作成しています。施設にアクセスして作業する職員は資質向上と組織の訓練などにも重視。職員からの問い合わせも含めた健康管理を徹底しながら、情報共有の輪に取り組んでいます。

地域の人たちとの緊密な交流を維持し、向上しながら透明性を高めていくことと、地域のみならず、広く支援を受ける上で不可欠だと考えています。

討論会プレゼンテーション

国立感染症研究所におけるBSL-4施設稼働と
バイオセーフティ・バイオセキュリティ

共存

西條 地域の皆さんに施設を見学してもらうといった活動は、ずっと続けてきました。腐心したのは透明性を高め、施設内でどういったことが行われているのか、働いている人はどんな人たちだろうかなどを説明することでした。今後は、これまで以上に説明責任が重要になると考えています。

寺井 私は厳重に管理された中で病原体を取り扱うBSL-4施設よりも、人知れず海を渡ってくる感染症がはるかに恐ろしいと思います。計画の前進を願っています。

小玉 会場からは、「雇用確保に役立つのか」「国だけでなく県、市も頑張ってほしい」「坂本地区以外の候補地はないのか」との質問や意見がありました。

安田 設置場所については、先ほどの講演でもお話し

康を守ってくださるという期待もあります。国だけではなく、県や市ももっと前向きに計画に関与していただきたいと切実に願っています。

久米 世界最高水準の安全管理という国との約束を信用し、今後の状況を見守りたい。同時に、世界最先端のBSL-4施設については前向きに理解した上で、国や大学には今後とも注文を付けていきたいと思っています。

安田 感染症研究では、研究に当たる研究者が一番のリスクを負います。なぜならリスクを負うのかと学生から聞かれますが、感染症研究者の一人として、一人でも多くの命を救いたいというのが私の思いです。

今この施設をつくらずに感染症に対する弱点を持ったままでは大きな問題が起きます。今つくらなければ、今後は

[共催]国立大学法人 長崎大学・文部科学省

お問い合わせ先 ▶ 長崎大学BSL-4施設設置検討準備室

電話番号:0120-095-819 長崎市文教町1番14号